

[特別講演]

パラリンピックの理解と東京パラリンピック

公益財団法人日本障がい者スポーツ協会

日本パラリンピック委員会事務局長

中森 邦男



1 はじめに

日本における障がい者のスポーツは、1965年の財団法人日本身体障害者スポーツ協会「現公益財団法人日本障がい者スポーツ協会・JPSA」の創設以降、厚生省（厚生労働省）が所管していたが2013年

9月に東京2020オリンピック・パラリンピック開催が決定したことで、JPSAの意向も踏まえ2014年4月に文部科学省（2015年からはスポーツ庁）に移管することとなった。

スポーツ庁は健常者スポーツ（オリンピックなど）と同様の強化策を実施し、強化費の大幅な増額、強化施設の充実、強化体制の強化や医科学情報サポートなど障がい者スポーツの強化環境は大きく進んできました。具体的には、競技団体に対する強化費の増額、JPC強化体制の強化、中央強化拠点（ナショナルトレーニングセンター）のオリンピック選手との共同利用とNTC拡充棟（イースト）の設置、医科学情報サポート、強化スタッフ制度やアスリート助成制度の設置などがある。さらに、日本財団パラリンピックサポートセンターの設置によるNFサポートと奨学金制度の設置、企業のアスリート雇用など、東京2020パラリンピック競技大会に向け、関係するスポーツ組織、経済界など関係組織・機関・企業の支援を受け、その強化環境は充実したものになっている。

2 パラリンピックの理解

1989年創設されたIPCは、当初から「Athletes Centered Organization」を謳い、アスリートを中心に置いている。様々な障がいのあるアスリートたちが創意工夫を凝らして限界に挑むパラリンピックは、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられてい

る。アスリートが見せる、困難なことがあってもあきらめずに限界に挑戦し続ける姿は、見る者に驚きや感動を与え、元気や勇気を生み出すなど、特に子どもたちにとっては素晴らしい刺激となる。

オリンピックと大きく異なるパラリンピックの特徴は、クラス分けと呼ばれ、障がいの種類、障がいの部位、障がいの程度（重さ）によって、競技能力に差が生じるために、同じ競技能力同士が競い合うようにクラスを分けて競技することにある。例えば陸上競技の100m走では、男女で30イベント（視覚障がい者6クラス、車いす使用者7クラス、脳性まひ者11クラスと立位の障がい者6クラス）が実施され30個の金メダルが授与される。クラス分けは競技ごとに規定されており、競技を観戦する前に、クラス分けを理解することで、より競技を楽しむことにつながる。

その他の特徴として、視覚障がい者と一緒に競技する陸上競技のガイドランナーなどで、障がいのある選手と健常の選手が協働し一緒に競技する競技種目がいくつか存在する。また、下肢切断者のスポーツ用義足や陸上競技や車いすバスケットボールなどのスポーツ用車いすで、競技用具の進歩が競技力向上をささえている。

3 まとめ

日本障がい者スポーツ協会は東京2020パラリンピックを成功させるために、全競技会場を満員の観客で選手を向かえるよう取り組みを実施し、また、金メダル7位以上を目標に、金メダル候補選手を選定し、競技団体とも連携しながら、個々の選手に対し強化支援を実施している。そして、東京パラリンピックを見たり、触れ合ったり、経験した人が障がい者の理解、特に障がいのある人の可能性の理解を通して、年齢、性別、人種や宗教の違いなど多様な人々の相互理解が進み、それぞれが豊かに活躍できる社会の実現のきっかけとなるよう願っている。